

本研究は Lucas (1972) モデルに関するものである。

松井 (2011) により Lucas (1972) モデルにおいて均衡物価関数が複数存在することが確認された。それは労働が無制限であるという Lucas (1972) のオリジナルの設定のもとでなされた。本論では、労働供給に上限を与えたモデルでも、内点解が満たされれば松井 (2011) 論文と同様に複数均衡が得られることを示す。また、論文では本来省略されるような数学的な議論に対し、より詳しい解説を加えたものとなっている。(本論の補論参照。) 更に松井 (2011) の論文に学会等で指摘されたコメントを反映した。なお、研究の最終的な目的は端点における均衡物価関数の分析であるため、本稿はそれに向けた部分的な研究結果となっている。

注意事項：

Lucas (1972) のモデルにおいて、労働供給に上限を与えたもとでも Lucas (1972) の主張する均衡物価関数 (貨幣中立的となる均衡物価関数) が存在することは岩田恒一 (1990) と岩田恒一 (1991) に既に確認されている。基本的な考え方は労働の上限に近づくにつれて家計の不効用が無限大になるため、均衡では端点解にならないというものである。